

「狭い道から広い風景へ」

—2023 年度同窓会総会・岩本先生講演会体験記—

于昊甬 博士二年

2024年3月23日、桃の開花を促そうとする陽気が溢れた春分の三日後、法文1号館113教室で中国哲学・中国思想文化学研究室同窓会総会が開催されました。多くの先生・先輩方々及び在学生たちが対面・オンラインで参加し、親睦を深める中、跡見学園女子大学名誉教授の岩本憲司先生が「私の「春秋学」学」と題するご講演により、武陵の漁師のように人生と学問の溪流を辿って、中国哲学・春秋学の壮大な桃源郷への旅に、私たちを招きました。

岩本先生は1947年の東京生まれで、幼少の頃に祖母より、柳橋で船頭役を担った「おばあさんのおじさん」が柳橋の芸者である花井お梅と知り合ったことなど、ドラマチックな「ファミリーヒストリー」を聞いていました。浅草寺幼稚園から田原小学校、蔵前中学校、上野高校を卒業して東京大学工学部の建築学科に入り、「大学紛争」のために一年留年した後、東京都庁に就職しました。しかし、三年後に仕事が心に合わないと感じて、将来のことを悩んでいたところ、父親から「憲司、三合炊くも四合炊くも、大した違いはないから」という激励を受けて中国哲学の研究を決心し、早稲田大学第一文学部東洋哲学科、そして東京大学大学院人文社会系研究科中国哲学研究専攻に進学しました。お世話になった先生方、学問を一緒に磨き合った同道たちと彼らが参加した会読会、「公羊注疏研究会」などについての温かい思い出を振り返る岩本先生の語りを拝聴し、この時期に先生が人生の狭くて険しい山道を登り、ようやく「豁然開朗」の境に辿り着いたことに、聴衆たちが深く共感しました。

跡見学園女子大学で三十五年間勤めた岩本先生は、春秋学の研究に専念しました。春秋三伝の注解の日本語訳としての必読書、『春秋穀梁傳范甯集解』（汲古書院、1988年）、『春秋公羊傳何休解詁』（汲古書院、1993年）と『春秋左氏傳杜預集解 上・下』（汲古書院、2001・2006年）という四つの巨冊を完成させ、更に「義」から「事」へと総括して春秋学の歴史を辿る研究書を著しました。ここでは、『左氏伝』は劉向・劉歆が『春秋』経と共通する事件が数多く、しかもより詳細に描かれている何らかの説話集を借用し、そこに『公羊伝』や『穀梁伝』のような「経解」の言葉を加えて、『春秋』経の伝（解説）としての体裁を整えたものだ（『義』から「事」へ—春秋学小史』汲古書院、2017年、第202～203頁、『春秋学用語集続編』汲古書院、2013年、第18頁を参照）という、『左氏伝』の成立と性格に関わる重要な帰結に行き着いています。また近年、田中麻紗巳『春秋穀梁伝楊士勛疏』（汲古書院、2015年）や野間文史『春秋左伝正義訳注』（全六冊、明德出版社、2017年～2019年）を代表とする新しい訳註の出版をきっかけに、岩本先生は『春秋学用語集補編』（汲古書院、2018年）や『中国古典翻訳の諸問題』（汲古書院、2020年）などで学界との議論の場を作り、また中国古典籍の翻訳についての問題に集中して力を入れることになりました。このようなことは、正に岩本先生が行

き着いて、そして開拓している「土地平曠にして屋舎儼然たり、良田・美池・桑竹の属有」る中国哲学・春秋学の桃源郷の風景と言えるでしょう。

それでは、岩本先生はどのように学問上の山野を跋涉してきたのでしょうか。今回のご講演で、先生は自分の方法論を「言葉から問題へ」という一文に概括しました。春秋三伝においての一つ一つの「言葉」は一見あまりに細かくて、なかなか興味を抱きにくいものですが、それらをめぐって慎重に考証して解釈を行なった結果、往々にして単なる言葉の意味に限らず、より広い「問題」にも通じるということ、岩本先生はその方法論を実践している連作、『春秋学用語集』（正編と「続編」「三編」「四編」「五編」「補編」を合わせて全六冊、汲古書院、2011～2018年、約四百項目）で示しています。今回の御講演ではその中から、十項目を選んで解説して下さいました。その具体例として、何休注や范甯注が特筆しなく杜預注だけが「無伝」という解説を繰り返しているのは、その時の『左氏伝』伝文のテキストが『春秋』経文に対してどのような形態で連なっていたかということに密に繋がっていること（『春秋学用語集』汲古書院、2011年、第75～78頁）、隠公九年経「大雨震電」と伝「大雨霖以震」との違いはまさに『左氏伝』の成立と性格を考え直す糸口となること（『春秋学用語集続編』汲古書院、2013年、第15～22頁）、また昭公七年経「暨齊平」に対する諸家の解釈から、賈逵・何休らの「義例主義」と許淑・服虔・杜預らの「伝文主義」との立場の対立が見えること（『春秋学用語集続編』汲古書院、2013年、第252～259頁）等々。先生のご研究は大変奥深く強い印象を我々に与えるものであり、このようにして「過去に行われて完結し」た経学の一つとしての春秋学を対象に取り上げ、現在研究し続ける営為を特に「春秋学」と称する岩本先生は、また武陵の漁師のように、個々の「言葉」という「初めは極めて狭く、纔に人を通ずるのみ」の岩の裂け目を歩き抜けた後に、学問上の「問題」という広大な洞天勝境に到達しているように思われます。

人生も学問も、「狭い道から広い風景へ」の桃源郷を探求する旅。大事なものは、細かいところを容易に見逃さないことと、最後まで地道な努力を根気よく続けることでしょう。日暮が近づき、2023年度中国哲学・中国思想文化学研究室同窓会総会および岩本先生の講演会は皆様の拍手と歓声に一旦幕を閉じましたが、私の心の底には一つの桃花溪がまだ永く流れて続けています。